

第4章 教科書教材の加工と活用

2 指導の実際

(3) 学習者に選択権を与える

コミュニカティブ・アプローチ(CLT)の基本原則

- ①形式だけでなく意味も重視すること
- ②学習者とのかかわりを追及すること
- ③学習者に選択権を付与すること

教科書本文を加工して学習者に選択権を与える活動

- ・対話文を丸暗記させる形式ではなく、対話文の中で置き換え可能なところを生徒に置き換えさせる。

生徒たちに置き換え候補を考えさせたり、教師が選択肢を提示するなどの方法をとることができる。

(4) 教材の拡張を図る

- ・対話文

- ①編集過程で削除されたと思われる要素を補う
- ②対話文に新たに文を加える

- ・対話（練習問題）

- ①生徒の回答にプラス1（追加の一文）を求める

CLTの3原則の中の「生徒の生活に立脚」という原則が取り入れられており、回答する生徒だけでなく、会話を聞いている生徒にも意味のある活動となる。

- ②例題通りのやり取りが終わった後に教師がすぐに追加質問をする

教師の生徒の聞き取りにくい発話を正確に聞き取る力と、即座に気の利いた質問をする力量が求められる。

(5) 挿絵・写真を活用する

挿絵や写真に関する質問をすることで生徒のアウトプットを引き出すことができる。

factual questions, inferential questions, personal questions を織り交ぜながら質問することが大切である。

これらの発問は本文指導の最後よりも最初の段階で行うことが望ましい。

↑本文に対するスキーマを学習者の中に確立することができるだけでなく、これまでに習

った英語表現を使って自身の感情や意見を伝えることができるということを生徒たちに体感させるため。

3 まとめ

教科書の扱いに関しては、よく教科書を教えるべきか、教科書で教えるべきかという二者択一的な問題が生じていたが、筆者は両方を重視するべきであると考えている。

フィンランドでは教科書中心の伝統的授業が行われているが、内容・質量共にとても充実している。これは教科書検定制度が廃止されていることや執筆者の多くが現場教師であることが影響していると考えられる。教師は教科書をあくまで素材として使い、児童・生徒からのアウトプットを引き出すために効果的に使用している。またアウトプットを引き出すためには指導法を工夫することだけでなく、生徒自身にアウトプットの必要性を感じさせる必要がある。

一方日本の教材は学習指導要領や教科書編集に関する様々な制約のため、必ずしも学習者にとって魅力的な教科書とは言い難いものとなっている。特に日本の英語教育において、アウトプットを引き出すためには教師の工夫が大変重要となってくる。

感想・考察

授業の中で今回取り上げた学習者に選択権を与えるための例と教科書の本文を拡張するという例は、実際に行ってみた結果かなり難しいものだった。

選択権を与えるために置き換え可能な部分を生徒に置き換えさせる例(p. 61)では置き換える内容によっては文法・意味に間違いが生じてしまう可能性がある。ただ置き換えさせるのではなく、間違えた文法・意味を生徒に教えないための指導内容を考える必要があるだろう。

教科書本文の拡張のための p. 62 と p.63 の方法は共に中学生にはかなり難しいものであると思われる。自分で内容を考え表現させるこの方法は英語力がある程度見に付いた高校生向けのものであるだろう。高校生でも内容によっては難しい場合がある可能性があるため、教師のサポートが重要になってくる指導法であると考えられる。

全体を通して私は、この章で述べられた指導法を授業で使うだけでなく、それに加え授業中に教師が生徒のサポートをすることが重要であると考えます。